

形態素「タ」の機能を求めて

——テキスト「羅生門」の分析——

山 本 雅 子*

On the Function of Morpheme *ta* :

Textual Analysis in *Rashomon*

Masako YAMAMOTO*

はじめに

言語的観点から捉えると、小説は、文の集合から成る構造体であり、そこでは、構成要素であるひとつひとつの文が文法的に機能し合い、全体としてひとつの有意義な文法構造を構成している。そのため、文法的な視点から小説を分析すると、いろいろな興味深い言語現象が見出される。

文末における形態素「タ」と「非タ」¹⁾の転換も、そのような言語現象のひとつである。これは、一般には過去形と現在形の転換とみなされており、歴史的現在という名で、「過去の出来事を今眼前で起こっているかのように生き生きと叙述するために用いられる現在時制の一用法」²⁾と説明されているものである。Jespersen が、これを“DRAMATIC PRESENT”と名付け、「話者はこれを用いるとき歴史の枠組みに踏み出し、過去のことを現在のことであるかのような芸術的幻想を生み出す」³⁾と、英語文におけるその効果について述べているのは、よく知られている。

では、日本語の物語における「タ」と「非タ」の転換も、Jespersen の言うような効果を生み出すためのものであり、歴史的現在という名のもとに起こる過去形と現在形の転換なのだろうか。次に掲げる文章は、谷崎潤一郎が『文章読本』の中で日本語文の文法について述べている一節であるが、この文章が示唆するように、日本語の場合は、必ずしもこの転換は歴史的現在の用法とばかりは言えないようである。

昔のことを記すのに「つえをとどむ」「山に登る」(略)等、現在止めの文章で一貫しているのかと思えば、「つえをとどむ」の直ぐ後へ持ってきて、「観念修行の庵なりけり」と、過去止めが挿んである。されば英文法における歴史的現在“Historical Present”の用法とも違っているのであります。

谷崎のこの文章から分かるのは、日本語の文章の中でも、過去と現在の時制の転換は起きるの

*外国語系列 (Department of Foreign Languages)

だが、その転換は、過去形で記せば過去となり、現在形で記せば現在となるという、時制本来の機能を生かした歴史的現在の用法とは異なるということだろう。となると、日本語には過去形、現在形という、時制を表示する形式があるとしても、実際の文章の中ではそれらは正しく機能していないということになる。これは一体何を意味しているのだろうか。そして、これは、視点を変えて考えれば、この転換は果たして時制の転換なのだろうかという問題にもなる。一般に過去形、現在形という呼び方で済まされているが、形態素「タ」と「非タ」の対立は、本当に過去と現在の対立を意味しているといえるのだろうか。

時制の形式と機能との不一致の問題は、いろいろな現象になって現れている。たとえば、動詞「行く」は現在形であると一般には言われているが、「私はパリに行く」の「行く」という動作の実現は未来である。また、助動詞「た」は、過去を示すと言われているが、探しものをしていた人が、「こんなところにあった。」と言う（書く）場合の「た」は、現在を示している。また、このような現象を広く国語学的観点から捉えれば、従来の国文法では、「タ」「非タ」の概念を一方は助動詞とし、他方は接辞とするという把握の仕方をしているという事実があるが、これらは本来、対立する概念として把握されるべきものではないだろうか。形態素「タ」と「非タ」の機能の把握の仕方の問題である。つまり、普遍的な機能は何かということになってくるのである。それが探り出されれば、小説における「タ」と「非タ」の転換を惹き起こしている根本的な要因も明らかになってくるのではないと思われる。

しかし、普遍的な機能を抽出するということは、問題が大きすぎ、容易にできるものではない。そのため、本稿では、その手始めとして、芥川龍之介の短編小説「羅生門」を対象とし、そこに現れる形態素「タ」のふるまいを観察、分析し、その範囲内から抽出できる機能を探ってみようと思う。分析の対象とするのは、単独に「タ」のついた文が終止的に用いられているもののみとする。また、「タ」「非タ」は同時に扱うにはあまりにも述べなければならないことが多すぎるため、本稿ではまずは形態素「タ」に焦点を当て、形態素「非タ」については「タ」を説明する際に必要な部分のみに言及し、詳しくは別稿に譲ることとする。

なお、「羅生門」をテキストとして用いた理由は、周知のように芥川の短編小説は構成に優れていると見られていること、また、そうであれば、最大の経済的手段が用いられているだろうから、分析対象としては適切であると考えられるということに依る。

1. 文の種類

一般に、小説とは出来事が時間的順序⁴⁾に配置されたものであり、そこには、行動するものと、その行動の背景とが存在すると考えられる。そのため、両者を描写する文は異なったふるまいをするのではないかという仮定のもとに、「羅生門」に現れる、文末が「タ」で終止している文（以下「タ」の文と記す）を、行動するものを描写している文と、背景を描写している文の二つに分けることにする。それぞれの用例を以下に挙げる（例文⁵⁾の番号は資料（本文）の番号である）。

例－1 (2)一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

(7)この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いがつづいて起こった。

上記の文を主体との関係から捉えてみると、(2)の文の主体は「下人」であり、これは登場人物である。以下、登場人物は単に〔人物〕と記す。これに対して(7)では主体は「災い」である。このような登場人物以外のものを〔非人物〕と記すことにする。このように分類すると、「羅生門」に現れる「タ」の文は、①主体が人物の場合、②主体が非人物の場合の二種類に分けられる。

2. 観察

1で分類した二種類の「タ」の文のふるまいの実際を見ていくことにする。まず、主体が人物の場合、次に非人物の場合のそれぞれを、そして最後に人物と非人物が混ざった場合をテキストから部分的に取り出して、見ていく。なお、用例の記述の仕方は、次のようである。

例 (資料本文の番号) 「タ」の文の述語部分 (主体)

また、文脈からは判別できるが、テキスト上では省略されている主体を意味する場合には、その主体の前に*をつける。

2.1 主体が人物の場合

2.1.1 「時の流れ」の形成

例－2 (40)立ち上がった (下人は)

(44)見回した (下人は)

(46)目に付いた (*下人は)

(48)踏みかけた (下人は)

上記(40)から(48)を談話の流れとして見ると、「立ち上がった」→「見回した」→「目に付いた」→「踏みかけた」と、下人の行為が時間の軸に沿って、単純に前へ前へと進んでいることが分かる。つまり、ここに、「時の流れ」が形成されている。「タ」の連続が時の流れを形成しているのである。

このようにして、「羅生門」に現れるすべての「タ」の文を検討し、時の流れとの相関関係を見ることは可能だが、紙幅の都合上、無駄が多すぎると思われるため、ここでは、もう一箇所だけ見ることにする。

例－3 (111)見守った (老婆は)

(113)動かした (*老婆は)

(115)伝わってきた (声が)

(117)失望した (下人は)

(111)から(117)の文章も、「見守った」→「動かした」→「伝わってきた」→「失望した」と、時の流れを形成している。しかし、**例-2**との違いがある。それは、(40)から(48)の場合、行為の主体はすべて下人であったのに対して、(111)(113)(115)は老婆、(117)は下人、というように主体が異なっていることである。しかし、老婆も、下人も、登場人物であることに変わりはなく、やはり、ここでも**例-2**と同様に、「夕」の文は時の流れを形成していることが実証できる。

なお、(115)の主体は「老婆」ではなく、「鳥の鳴くような声が」という表現になっているが、これは「鳥の鳴くような」が老婆を象徴する表現であるので、この声は老婆の声とみなせる。また、「声」のように〔人物〕の一部に属するものも、主体の分類の際には〔人物〕とみなすこととする。他に「考え」「恐怖」「憎悪」「意識」「勇気」という心の内に属するものも、主体はそれらを有する〔人物〕とみなすこととする。

2.1.2 「同時」の表示

次の例は**例-2****例-3**とは異なった結果を示している。

例-4 (64)覆った (下人は)

(65)忘れていた (*下人は)

(67)見た (下人の眼は)

(69)眺めていた (老婆は)

(71)忘れていた (下人は)

(73)抜き始めた (老婆は)

上記(64)から(73)の例文の文末を記述してみると、(64)「鼻を覆った」→(65)「忘れていた」→(67)「見た」→(69)「眺めていた」→(71)「忘れていた」→(73)「抜き始めた」となるが、この場合、〔→〕は必ずしも時の流れを示してはいない。これらのうち、(64)→(67)→(73)は、**例-2****例-3**で見たのと同様に、時の流れを形成している。しかし一方、(65)(69)(71)はそれぞれ、(65)は前の文(64)で、(69)(71)は(67)で記述された時点に位置したまま、事象を状態として提示しているだけであり、時の移動を感じさせない。

このように、時の移動を感じさせない例としては、さらに次の例が挙げられる。

例-5 (73)抜き始めた (老婆は)

(81)分からなかった (下人は)

(82) 知らなかった（*下人は）

(83) 悪であった（下人にとっては）

これら四つの文の時間的關係を見てみると、まず、(73)で「抜き始めた」時点が提示され、その全く同じ時点で、(81)「分からなかった」(82)「知らなかった」(83)「悪であった」という、下人の心の状態が書かれている。ここには時の流れは存在していない。

以上 [例-4] の一部と [例-5] では時の流れを形成しない「タ」を見た。これらの述語は品詞としてはそれぞれに異なるが、状態を示しているという点においてはすべて共通している。以後、本稿では、このような状態を意味している述語を、〈状態述語〉と呼ぶこととする。なお、これに対し、[例-2] [例-3] で取り上げた用例のように動作を意味する述語を、〈非状態述語〉と呼ぶことにする。

したがって、[例-4] [例-5] からは、状態述語の場合は、「タ」が並んでも、時の流れを形成しないことがいえるということとなる。

以上、主体が人物の場合の「タ」のふるまいを見てみた。紙幅の都合上、すべてを書き出すことはできないが、テキストに現れる、主体が人物である「タ」のすべてを検討した結果、それらは例外なく、非状態述語の「タ」は「時の流れ」を形成しており、状態述語の「タ」と「テイタ」は、その前に位置する非状態述語の「タ」で示されている時点と「同時」を示しているということが明らかになった。

2.2 主体が非人物の場合

2.2.1 「時の流れ」と「同時」

[例-6] (7) 起こった（災いが・この二三年）

(10) なかった（顧みる者⁶⁾が）

(13) 出来た（習慣さえ）

(15) 集まって来た（からすが）

(17) 見えた（それが）

上記(7)から(17)の時の流れを辿ると、(7)→(13)→(15)となり、(10)と(17)では、時の移動は起っていない。しかし、(17)の場合は状態を示しており、(15)との同時を示している。これは2.1.2と同じ現象である。ところが、(10)の場合は「なかった」と状態述語であるにもかかわらず、(7)と同時点とはいえない。(10)「顧みる者がなかった」という状態は、(7)「災いが起こった」後に生じた状態であり、ここには時間の前後関係が成立しているように見える。しかし、この前後関係は今まで見てきたような明らかに順序を示すものとは異質のようである。また、単なる時の移動とも異なっているように思われる。これが何に起因しているものなのかは、次の考察の章で考えてみたい。

2.2.2 因果関係

例－7 (7)何故かという、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉という災いがつづいて起こった。

(8)そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。

上の文章の相互の関係を見ると、(7)は(8)の原因である。つまり、(7)と(8)は因果関係にある。

例－7 の場合、これらの事象間に因果関係を認める根拠としては、(8)の「そこで」を指標語句として挙げることができる。しかし、「羅生門」のテキスト中、因果関係にあるすべての文と文との間にこのような指標語句が存在するわけではない。だが、指標語句がなくても事象と事象の間に関係が因果の意味を持っていれば、それらは因果関係にあると考えることとする。そして、このように考えると、「羅生門」に現れる〔非人物〕を主体とした「タ」の文は、すべて、事象間に成立する因果関係の原因・理由を示しているといえる。また、その結果は多くの場合、「非タ」で示されている。しかし、次の例を見てみよう。

例－8 (10) (略) 羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧みる者がなかった。

(11)すると、その荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。

(12)盗人が棲む。

(13)とうとうしまいには、(略) 棄てていくという習慣さえ出来た。

(14)そこで、日の目が見えなくなると、(略) 事になってしまったのである。

まず、(10)が原因となり、(11)(12)(13)を導き出している。そのため、結果としての(13)は、本来「非タ」になるべきであるが、次には、(13)が原因となって、(14)という結果を導き出しているため、(13)は原因を表示する「タ」となっている。このように、因果関係の結果であっても、同時にそれが他の文の原因となっている場合には「非タ」とならず、原因としての機能の方が強くなり、表示は「タ」となる。したがって、例－7 例－8 から、次のことがいえることになる。

「タ」は、事象間に成立する因果関係の原因・理由を示す。そして、その結果は、原則として「非タ」で示されるが、その文が同時に他の文の原因・結果となる場合には、結果であっても「タ」で表示されることとなる。

2.3 主体が人物と非人物の場合

例－9 (2)待っていた (下人が)

(7)起こった (災いが・この二三年)

- (10)なかった（顧みる者が）
- (13)出来た（習慣さえ）
- (15)集まってきた（からすが）
- (17)見えた（それが）
- (21)眺めていた（下人は）

上記(7)から(17)は、すでに「例－6」として扱ったため、その間の説明は省略する。ここでは、(7)から(17)と、それらをはさむ(2)と(21)との時間的關係を見てみたい。まず、(2)と(7)の間には時間的關係はない。また、(17)と(21)の間にも時間的關係はない。しかし、(2)と(21)は同時を示している。これは、今まで見てきた、「タ」や「テイタ」が並ぶと「時の流れ」や「同時」を示していた現象とは大きく異なるものである。主体によって、分別した文の種類がちがいに、それぞれの文の時に対する関わり方が異なることがここから分かるが、これがなにを意味するのかは、次の考察の章で考えることとする。

3. 考察

2. 観察 では、主体との関係から文の種類を分け、形態素「タ」がテキストの中で、どのようなふるまいをしているのかを観察してきたが、次のこれらの観察に基づいて考察してみる。

3.1 アスペクト

3.1.1 完結相と不完結相

2.1の「例－2」「例－3」と「例－4」のちがいについて考えてみる。このちがいは「タ」と「テイタ」の相違が起因となっている。「タ」の場合について述べると次のようである。まず、一つの「タ」の文が記述されると、そこに時点が設定される。そして、次の「タ」の文が記述されるとそれまでの時点が、新たに設定し直されることになる。したがって、「タ」が記述される毎に〈時〉は前へ前へと進んでいく。しかし一方、「テイタ」の場合には、そのような時点の設定の置き換えは行われず、ある時点に於いての行為を状態として示すだけにとどまる。時点に関して言えば、「タ」を基準とした、〈同時〉の表示である。つまり、「タ」も「テイタ」も、ともに〈時〉を表示するが、〈時〉の把握の仕方が異なるのである。これはアスペクトのちがいである。この「タ」と「テイタ」の対立を、呼び名だけコムリーの用語を借用して、完結相と不完結相の対立と呼ぶこととし、本稿では、それぞれの用語を上の観察結果から、次のように規定することとする。

完結相

その事象の、始まり、半ば、終わりという時間的內部構造を示すことを意図せず、〈コトガラ〉と捉える。

不完結相

その事象を時間的內部構造の一点に位置づけて捉える。

3.1.2 状態述語と非状態述語

次にこの完結相、不完結相の規定を[例－5]に照らし合わせて考えてみる。[例－5]は今まで例と異なり、「タ」であるにもかかわらず、時の流れを押し進めることはなく、その前に示されている非状態述語の「タ」と同時を示している。これをアスペクトの観点からみると、[例－4]の「テイタ」と同じ機能を果たしていることから、形式は「タ」でありながら、不完結相を示していることになる。つまり、状態述語の場合は、「タ」も不完結相を表示するといえよう。

そして、このことは2.2の[例－6]にも、そのままあてはまることである。[例－6]の(7)→(13)→(15)の流れは、非状態述語の完結相が並べられたことにより生じるものであり、(17)は状態述語であるため、不完結相となり、(15)との同時性を示している。

以上の関係を表にすると次のようになる。

述語の種類	形式	アスペクトの意味	機能
状態の述語	「タ」	不完結相	<同時>を表示
	「テイタ」	不完結相	<同時>を表示
非状態述語	「タ」	完結相	<時の流れ>を形成

3.1.3 <時の流れ>の層

3.1.1と3.1.2で、主体が人物の「タ」の文だけを取り出した場合、また、非人物の「タ」の文だけを取り出した場合、文と文のあいだには「時の流れ」か「同時」という時間的關係が存在しているのを見た。しかし、主体を分けずに「タ」をたどった場合には、2.3で見たように、何の時間的關係も見いだすことはできない。これは「タ」の文が、それぞれの主体の別に応じて異なった時の流れを形成していることを意味している。「羅生門」の場合は大きく二つに分類された主体に従って、二つの時が層を成して流れているといえよう。

3.1.4 残された問題点

3.1.4.1 副詞ないし副詞相当語句

さて、2.2.1の[例－6]で問題となった(7)と(10)の關係について述べることにする。(7)の「この二三年、京都には、地震とか辻風とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。」という文からは、副詞句「この二三年」が文頭にあること、また、主体「災い」が「地震」「辻風」「飢饉」という語句で説明されているように種類が複数あることから、非状態述語「起こった」は一度だけのことではなく、反復していることが想定される。そして、反復期間が「この二三年」であるため、(7)の「起こった」は完結相でありながら、この「タ」の意味するところには時間の幅ができることとなる。そこで、(10)は、その時間の幅の中に含まれる同時性を示す。つまり、最初に災いが起こった時点に対してはそれより後の關係になるが、「この二三年」という時間の幅にたいしては

同時性を示している。このように考えると、(7)と(10)の関係も完結相と不完結相の関係で説明できることになるだろう。

さて、ここで、複雑な関係の鍵になっているのは、「この二三年」という副詞句である。アスペクトの問題を考える場合、副詞ないしは副詞相当語句の果たす役割はかなり大きなものであらうと容易に推測がつくが、今回は、これ以上立ち入らず、別の機会に論じたいと思う。

3.1.4.2 ta と ru の対立

さて、ここでもう少し詳しく完結相と不完結相について考えてみたい。本文中、「タ」で記述されている最初の文を用例として取り上げる。

(2)一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

この(2)を形態素に分割して表示すると(2)'のようになる。

(2)'Hitori-no-Genin-ga-Rashomon-no-shita-de-amayami-wo-mat-te-i-ta.

この文のうち、述語の部分だけを取り出すと [mat-te-i-ta] となる、これは不完結相である。これを完結相と対比して記すと次のようになる。

① 完結相 : mat- ϕ -ta (ϕ は無標を表示する)

不完結相 : mat-te-i-ta

しかし、日本語の完結相・不完結相の相違は「非タ」にもあてはまるものであり、非タの完結相の場合は次のようになる。

② 完結相 : mat- ϕ -u

不完結相 : mat-te-i-ru

これら①②を比較すると、[mat] まだが語幹であり、完結相では [ϕ], 不完結相では [te-i] の部分が共通している。つまり、形態素 [ϕ] と [te-i] が完結相と不完結相を表示していることになる。

以上をまとめると、次のようになる。

完結相 : [ϕ]

不完結相 : [te-i]

このように考えてくると、完結相と不完結相の対立は、[ϕ] と [te-i] の対立であって、[ta] と [u/ru] の対立ではないことになる。では、本稿で問題となっている [ta] と [u/ru] を対立させている機能は何なのだろうか。次の節で考えてみることにする。

3.2 生起時点

3.2.1 時の流れ

まず、2.1と3.1から次のことが言えよう。すなわち、完結相「タ」は、時の流れを推し進め、不完結相の「タ」「テイタ」は、その前に位置にする完結相「タ」との同時性を表示するということである。しかし、3.1.4.2で見たようにこのちがいは、形態素 [∅] と [te-i] のちがいがからくるものであり、形態素 [ta] の機能からきているものではない。そのため、形態素 [ta] の機能は、「時の流れ」と「同時」の表示という機能を取り除いた結果残るものと考えなければならぬ。となると、これまでのテキスト分析からは次のことがいえよう。つまり、作品「羅生門」の世界は、最初に現われた「タ」と最後の「タ」とで時のフレームを作り、その中に位置する一つ一つの「タ」が、「タ」で表されている事象が、記された順に生起したことを表示している。したがって、このことから、形態素 [ta] は事象の生起時点を表示する機能を持っていると結論づけることができよう。

3.2.2 出来事

では、このように事象に時点が与えられるというのはなにを意味するのだろうか。ハンス・ライヘンバッハ (1986・荻原明男 訳) の次の文章は重要な示唆となる。

空間内のある一点を決定したい、そのためには三つの数字が必要である。部屋のなかに電灯がぶらさがっているとしよう。その位置はどのようにすれば決定できるのだろうか。床・後ろの壁・横の壁からそれぞれ距離を測定する。この三つの数字が空間内のその位置を決定する。この三つの数字がいわゆる座標と呼ばれているのである。空間は、この種の記述に当たっては三つの数字を必要とするので、三次元である。空間内の一点だけではなく、一つの出来事を決定しようと思えば、数字がもう一つ必要となる。すなわち時刻の表示が必要となる。電灯のスイッチを瞬間的に入れて光らせる、としよう。これは一つの出来事である。この出来事は、電灯の位置を決定する三つの数字以外に、光る時刻を決定する第四の数字も分かれば、完全に決定することができる。

上記のライヘンバッハの文章を援用して「タ」の意義を説明すると、次のようになる。つまり、ある場所でのある物体の位置づけをする場合には三つの次元に言及する必要があるが、それが物体ではなく、ある世界でのある出来事の位置づけとなると、そこに「時間」というファクターが必要となるのである。

「羅生門」では「タ」がそのファクター、すなわち、「時間」を表示しているのである。さらに、これを逆の視点から捉えれば、ある事象に「時間」というファクターが加えられると、その文が表す事象が実際に生起したことが示されることになり、その事象はその世界での、〈実現した出来事〉となるのである。

3.2.3 因果関係

2.2.2の因果関係を示す「タ」からは次のことが言えよう。因果関係とは、事象と事象との間

に成立する関係である。ある事象が二つ生起し、それらが因果関係にあることを認めるためには、次のことが言えなければならない。つまり、因果となる事象の一個一個は、個別的な事象であるため、本来、どの時点で生起してもよいが、それによって惹き起こされる結果は、原因である事象が真に生起したことを認めた後でなければ認められない。したがって、二つの事象を因果関係にあるものとして提示したい場合には、まず、原因となる事象に、その事象の生起時点を付さなければならない。これを2.2.2から見ると、原因となる事象、すなわち時点が付されている事象は、「タ」で表示されている。つまり、ここでも形態素「タ」は事象の生起時点を表示する機能を持っていることを意味しているといえることになる。

3.3.3 時間の系列

「時間」をどう捉えるかという問題に迫ろうとすると、あまりに哲学的すぎて、筆者の力の及ぶところではない。しかし、滝浦静雄（1976）の中にある、マクダガートの次の説明は興味深い提示をしているように思われる。

マクダガートは、系列としての時間の特性を考察するに当たって、まず、「変化」という概念に注目する。（略）彼は系列一般に次の三つの種類を区別する。その第一は、その諸項が過去・現在・未来と続く系列で、彼はこれをA系列と名付ける。第二は、その諸項が前（earlier）と後ろ（later）という関係で並ぶ系列で、これはB系列と名付けられる。そして第三は、ただ一定の順序の規定だけを含む系列で、これを彼はC系列と呼んでいる。

つまり、マクダガートによれば、時間の系列は、A、B、Cの三つの系列に分類されるというのである。そこで、ここでは、それぞれの系列を「タ」と関連させて考えてみることにする。

まず、「羅生門」では、3.2.1で考察したように、起点と終着点が「タ」で示された数直線上に、「タ」が連続して位置している。「タ」と「タ」の間が短ければ、読み手に、時の流れのピッチの速さを感じさせ、その間が長ければ、ゆったりとした時の流れを感じさせる。そうした時の流れを形成しているように見せている「タ」であるが、それは、「タ」の並び方が見せる現象効果であって、「タ」の機能ではない。「タ」の機能は「時点の表示」それだけである。時に関わるそれ以上の情報の提供は、「タ」はしない。つまり、これはC系列の、順序の規定に相当するものといえよう。

また、順序があれば、当然そこには前後の関係が生じる。そのため、「タ」の機能にはあたかもB系列もあるかのように見えるかもしれないが、しかし、それは、順序が生み出したものであって、「タ」の機能が生み出したものではない。「タ」が並んだ場合の現象効果である。現象効果と機能を同一視してはいけない。

A系列に関しては、テンスはダイクシスであるため、書き手の時間的位置について言及しない限りテンスについては何も述べることはできない。

以上、このように、マクダガートの論を採用すると、「タ」の機能が単に時点を示すだけであ

ることが、より明確に説明できるだろう。

3.4 まとめ

一般に小説は出来事の群れが順序づけられたものであり、出来事は物的出来事と心的出来事の二つに分けられる。前者は実際に起こったこととして記述される出来事であり、後者は登場人物が、心の中で考えたり、感じたりしたことが記述される出来事である。両者は因果的相互依存関係にある。これを説明すると、次のようになる。例えば、ある登場人物が心の中で何かを考えたとすると、それがその人物の身体的行為を惹き起こす。これが物的出来事となる。すると、今度はその物的出来事が次の出来事（心的でも物的でもよい）を引き起こす、というように、出来事と出来事が次々に関連して生起していく関係である。そして、この出来事の連鎖が一つの小説世界を作り上げるのである。このような出来事の実現を「羅生門」では、形態素「タ」が表示しているのである。

おわりに

テキストに現れている「タ」は、「時の流れ」の形成か「同時」の表示という働きを見せているため、形態素「タ」の機能自体がそれらであるかのように見えるが、実際には、「時の流れ」「同時」の表示は、完結相、不完結相というアスペクトの相違からくるものであることが、観察・考察の結果として明らかになった。そして、完結相、不完結相を形式化することにより、形態素[ta]の機能は別のものであることも明確化された。しかし、現実にはテキストに現れている「時の流れ」の形成、「同時」の表示という「タ」で表示される述語部の働きは動かすことのできない事実である。そこで、その事実から、完結相、不完結相の示す機能を除くと、そこに残るのは、「時点」の設定という機能だけとなり、これが形態素「タ」の機能であることが結論づけられた。これは、本稿の「はじめに」で述べた歴史的現在の観点とは全く異なるものである。すなわち、形態素「タ」は、歴史的現在では過去の時点を表示するものとなっているが、「羅生門」の分析からは、単に時点を表示するのみの機能であるということになったのである。

「時点」の設定という機能は、一見、至極単純であるかのように見えるかもしれないが、それが、文に対して果たす役割は大きい。なぜなら時点を付加するということは、その事象が〈真に生起する〉ことを表示するからである。つまり、出来事の実現を意味することとなるのである。これを小説「羅生門」でいえば、「タ」が付されることによって、その事象は実際に起こった出来事となり、時間的に順序づけられた出来事が「羅生門」の世界を形成しているということになるのである。

本稿は、「羅生門」の分析だけにとどまっているので、ここで抽出された「タ」の機能をそのまま「タ」の言語事象を説明する手だてとすることはできないが、「タ」に出来事の実現を表示するはたらきがあるとすれば、「はじめに」で例とした「こんなところにあった」の「た」も、「今

までさがしていたものが存在する」という出来事が実現したことが、「タ」によって表示されていると説明できるかもしれない。また、従属節の、「今度東京へ行ったら、……」の「行った」も「行く」という出来事の実現が「タ」によつて示されていると説明できそうな気がする。こうした現象を説明することについても「タ」と時点の関係から今後検討していきたいと思う。また、「タ」の機能を明確にするためには「非タ」の機能を明示しなければならないことは当然である。「非タ」についても近い将来に述べたいと考えている。

注

- 1) 活用語の終止形、及び、「タ」に変換できない助動詞の終止形をいう。
- 2) 『新英語学辞典』研究社 1982 p.537からの引用。
下線部筆者。以下同様。
- 3) 『英語学辞典』研究社 1982 p.347からの引用。
- 4) 時間的順序とは、必ずしも前へ移動するばかりではなく、回想のように、後ろへ移動することも意味するものとする。
- 5) 本稿での例文はすべて芥川龍之介『羅生門・鼻』（新潮文庫・平成3年）の中の「羅生門」を採用した。これは本稿が現代日本語の分析のための論であることから、現代仮名遣いの方がより適切であるという判断に基づいている。
- 6) この場合は「者」であり、人物ではあるが、話の展開には直接関与する人物ではなく、背景描写の役割をしているとみなせるため、〔非人物〕の扱いをした。

参考文献

- 芥川龍之介 1991『羅生門・鼻』新潮文庫
 木村 毅 1980『小説研究十六講』恒文社
 金田一春彦 1976『日本語動詞のアスペクト』麦書房
 工藤真由美 1989「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『言葉の科学3』麦書房
 白井賢一郎 1991『自然言語の意味論』産業図書
 関口 安義 1992「羅生門」『国文学・芥川龍之介特集』学燈社
 曾我 松男 1984「日本語の談話における時制と相について」『月刊言語』13巻4号
 滝浦 静雄 1976『時間—その哲学的考察』岩波書店
 谷崎潤一郎 1934『文章読本』中央公論社
 牧野 成一 1983「物語の文章における時制の転換」『月刊言語』12巻1号
 町田 健 1989「日本語の時制とアスペクト」アルク
 Comrie, Bernard: Aspect, Cambridge University Press, 1976
 Hoppen Paul J.: ASPECT AND FOREGROUNDING IN DISCOURSE,
 SYNTAX AND SEMANTICS 12 & 14, 1979
 Reichenbach, Hans: Elements of Symbolic Logic. The Macmillan N.Y. 1947
 [石本新訳『記号論理学の原理』大修館書店, 1982]
 Reichenbach, Hans: From Copernicus to Einstein
 [荻原明男訳『相対性理論の誕生』講談社学術文庫]
 Teun A. van Dijk: Text and Context, Longman 1977
 van Dijk Kintsch: Strategies of Discourse Comprehension, Academic Press 1983
 Weinrich, Harald: Tempus. Kohlhammer, Stuttgart, 1977

〔協阪豊訳『時制論』紀伊国屋書店、1982〕

(資料本文)

1. ある日の暮方の事である。
2. 一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。
3. 広い門の下には、この男のほかにはだれもいない。
4. 唯、所々丹塗りのはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。
5. 羅生門が朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子がもう二三人はありそうなものである。
6. それが、この男の外には誰もいない。
7. なぜかと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災が続いて起こった。
8. そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。
9. 旧記によると、仏像や仏具を打ち碎いて、その丹が付いたり、金銀の箔が付いたりした木を、路ばたに積み重ねて、薪の料に売っていたという事である。
10. 洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。
11. するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸がすむ。
12. 盗人がすむ。
13. とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くと云う習慣さえ出来た。
14. そこで、日の目が見えなくなると、だれも気味を悪がって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。
15. その代わりまたからすが何処からか、たくさん集まって来た。
16. 昼間みると、そのからすが何羽となく輪を描いて、高い鴟尾まわりを鳴きながら飛びまわっている。
17. 殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それがごまをまいたようにはっきり見えた。
18. 烏は、勿論、門の上にある死人の肉を、ついでみに来るのである。
19. ——尤も、今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。
20. 唯、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の一番上に段に烏の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。
21. 下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襦の尻を据えて、右の頬に出来た、大きなにきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。
22. 作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。
23. しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。
24. ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。
25. ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。
26. 前にも書いたように、当時の京都の町はひととおりならず衰微していた。
27. 今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。
28. だから、「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも、「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言うほうが、適当である。
29. その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。
30. 申の刻下がりから降りだした雨は、いまだに上がる気色がない。
31. そこで、下人は、何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——言わばどうにもならないことをどうにかしようとして、取り留めもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

32. 雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあという音を集めてくる。
33. 夕やみはしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出したいらかの先に、重たく薄暗い雲を支えている。
34. どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいるいとまはない。
35. 選んでいれば、墓土の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。
36. そうして、この門の上へ持って来て、犬のように捨てられてしまうばかりである。
37. 選ばないとすれば、——下人の考えは、何度も同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。
38. しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。
39. 下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」の片を付けるために、当然、その後に来るべき「盗人」になるよりほかにしかたがない」ということを、積極的に肯定するだけの勇氣が出ずにいたのである。
40. 下人は、小さくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。
41. 夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。
42. 風は門の柱と柱との間を、夕やみとともに遠慮なく、吹き抜ける。
43. 丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。
44. 下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。
45. 雨風の憂えのない、人目にかかる恐れのない、一晚楽に寝られそうな所があればそこでともかくも夜を明かそうと思ったからである。
46. すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目に付いた。
47. 上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。
48. 下人はそこで、腰に下げた聖柄の太刀がすべらないように気を付けながら、わら草履を履いた足をそのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。
49. それから、何分か後である。
50. 羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。
51. 楼の上からさす火の光が、かすかにその男の右のほおをぬらしている。
52. 短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのあるほおである。
53. 下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだとたかをくくっていた。
54. それが、はしごを二、三段上ってみると、上ではだれかが火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。
55. これは、その濁った黄色い光が、隅々にくもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。
56. この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。
57. 下人はやもりのように足音を盗んでやっと急なはしごを、いちばん上の段まではうようにして上りつめた。
58. そうして体をできるだけ、平らにししながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る楼の内をのぞいてみた。
59. 見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、幾つかの死骸が、無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つとも分からない。
60. ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。
61. もちろん、中には女も男も混じっているらしい。
62. そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。

63. しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。
64. 下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻を覆った。
65. しかし、その手は次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。
66. ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである。
67. 下人の眼はそのとき、初めてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。
68. 檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた白髪頭の猿のような老婆である。
69. その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。
70. 髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。
71. 下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。
72. 旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。
73. すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから今まで眺めていた死骸の首に両手を掛けると、ちょうど、猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。
74. 髪は手に従って抜けるらしい。
75. その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。
76. そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。
77. ——いや、この老婆に対するとっては、語弊があるかもしれない。
78. むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。
79. このとき、だれかがこの下人にさっき門の下でこの男が考えていた飢え死にをするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、なんの未練もなく飢え死にを選んだことであろう。
80. それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように勢よく燃え上がりだしていたのである。
81. 下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くか分からなかった。
82. したがって、合理的には、それを善悪のいずれに片付けてよいかわからなかった。
83. しかし下人にとっては、この雨の夜にこの羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけで既に許すべからざる悪であった。
84. まもちろん、下人は、さっきまで、自分が、盗人になる気でいたことなどは、とうに忘れていたのである。
85. そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。
86. そうして聖柄の太刀に手を掛けながら、大股に老婆の前へ歩み寄った。
87. 老婆が驚いたのは言うまでもない。
88. 老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。
89. 「おのれ、どこへ行く。」
90. 下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいてにげようとする行く手をふさいで、こうののしつた。
91. 老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。
92. 下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。
93. 二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。
94. しかし勝敗は、初めから分かっている。
95. 下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。
96. ちょうど、鶏の足のような、骨と皮ばかりの腕である。
97. 「何をしていた。

98. 言え。
99. 言わぬと、これだぞよ。」
100. 下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、その目の前へ突きつけた。
101. けれども、老婆は黙っている。
102. 両手をわなわな震わせて肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗くっている。
103. これを見ると、下人は初めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということ意識した。
104. そうしてこの意識は、今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にかさましてしまった。
105. 後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、安らかな得意と満足とがあるばかりである。
106. そこで、下人は、老婆を見下ろしながら、少し声を和らげてこう言った。
107. 「おれは検非違使の庁の役人などではない。
108. 今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。
109. だからおまえに縄をかけて、どうしようというようなことはない。
110. ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それをおれに話さえばいいのだ。」
111. すると、老婆は、見開いた目をいっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った。
112. まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目を見たのである。
113. それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように、動かした。
114. 細いので、とがったのどぼとけの動いているのが見える。
115. そのとき、そののどから、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。
116. 「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」
117. 下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。
118. そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな侮辱といっしょに、心の中へはいつてきた。
119. すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。
120. 老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。
121. 「なるほどな、死人の髪を毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。
122. じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことは、されてもいい人間ばかりだぞよ。
123. 現に、わしが今髪を抜いていた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。
124. 疫病にもかかって死ななんたら、今でも売りに往んでいたことである。
125. それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯共が、欠かさず菜料に買っていたそう。
126. わしは、この女のしたことが悪いとは思っていない。
127. せねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくしたことであろ。
128. されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。
129. これとてもやはりせねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。
130. じゃて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」
131. 老婆、大体こんな意味のことを言った。
132. 下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を、聞いていた。
133. もちろん、右の手では、赤くほおにうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。

134. しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。
135. それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。
136. そうして、またさっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然反対な方向に動こうとする勇気である。
137. 下人は、飢え死にをするか盗人になるか、迷わなかったばかりではない。
138. そのときの、この男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考える事さえできないほど意識の外に追い出されていた。
139. 「きっと、そうか。」
140. 老婆の話が終わると、下人はあざけるような声で念を押した。
141. そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくように言った。
142. 「では、おれが引剥をしようと恨むまいな。
143. おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」
144. 下人は、素早く、老婆の着物をはぎ取った。
145. それから、足にしがみつこうとする老婆を手荒く死骸の上へ倒した。
146. はしごの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。
147. 下人は、はぎ取った檜皮色の着物をわきに抱えて、瞬く間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた。
148. しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。
149. 老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口で、はって行った。
150. そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞき込んだ。
151. 外にはただ、黒洞々たる夜があるばかりである。
152. 下人の行方は、だれも知らない。